

安良川遺跡の概要

新里亮人
伊仙町教育委員会

SHINZATO Akito
Board of Education
Isen Town

1. 遺跡の位置と環境

安良川遺跡は、鹿児島県大島郡笠利町用字安良川に所在する。昭和40年頃、道路工事に発見され、その出土品（土器、石器）が白木原和美によって報告されている（白木原1971）。

遺跡は、笠利半島北部の太平洋岸、標高3.5から4.0 mの砂丘上に位置し、西側に山稜、北側に河川を備え、東側にリーフが広がる自然環境に囲まれている（図4）。

2. 調査の概要

平成15年、土地所有者による畑の土壌入れ替えに伴い、笠利町教育委員会を主体とする緊急調査が行われた。平成17年には調査報告書が刊行されている（中山編2005）。

遺跡の概要と調査参加者は以下の通りである。なお、調査参加者の所属は平成15年当時のものである。

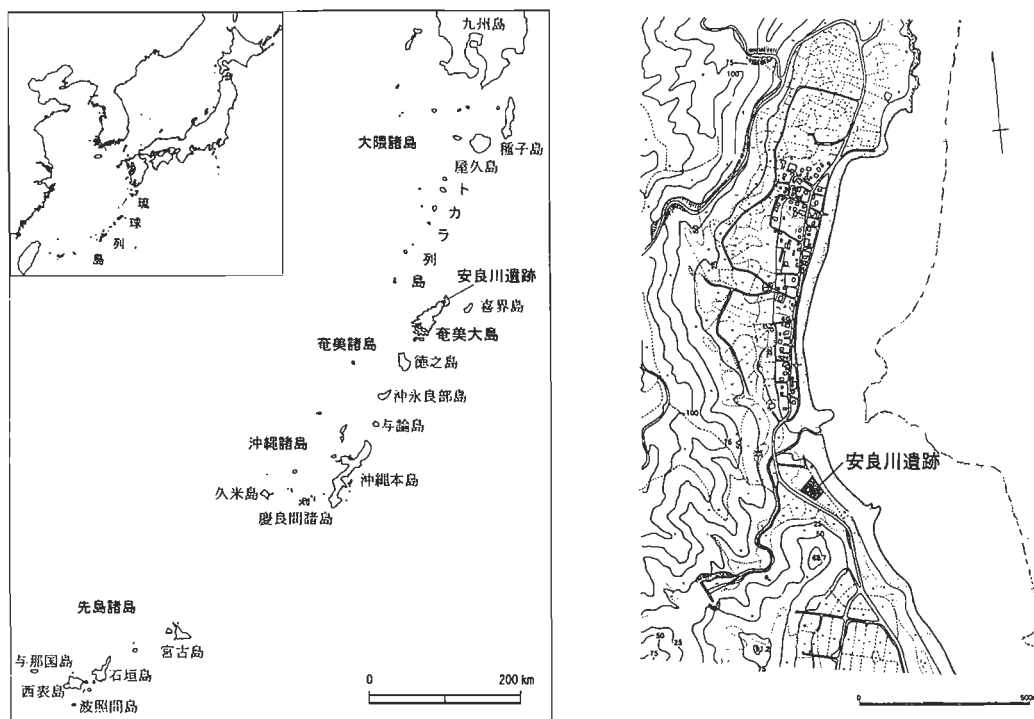


図4 安良川遺跡の位置

遺跡の概要

遺跡名 : 安良川 (アラゴー) 遺跡
所在 : 大島郡笠利町用安良川
時期 : 兼久式土器期
遺跡の種類 : 貝塚
遺跡立地 : 標高3.5~4.0mの海岸砂丘
調査主体 : 笠利町教育委員会
調査原因 : 土壌入れ替えに伴う緊急調査
調査面積 : 276m²
調査期間 : 平成15年 4月24日~5月10日
調査参加者

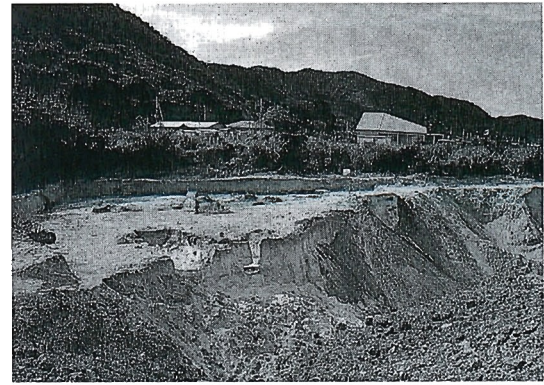


写真2 安良川遺跡

(南から。上部のクロスナ層が遺物包含層)

中山清美 (笠利町歴史民俗資料館)、木下尚子 (熊本大学文学部)、岸本義彦 (沖縄県立埋蔵文化財センター)、黒住耐二 (千葉県立中央博物館)、樋泉岳二 (早稲田大学)、高宮広土 (札幌大学)、松本信光 (笠利町役場税務課)、新里亮人 (熊本大学大学院博士課程2年)、金 姓旭、芝 康次郎、西嶋剛広 (以上熊本大学大学院修士1年)、沓岐尾可奈子、沖 謙介、神川めぐみ、児玉 幹、三宮慶太、末永浩平、八郷芙美、前田真由子、松ヶ野 恵、山下典子 (以上熊本大学文学部考古学研究室3年)、名島弥生 (慶応大学大学院)、藤江 望 (矢掛町教育委員会)、植田康男、滝澤裕一 (以上笠利町在住)

3. 調査の方法

発掘調査の開始時、遺跡の南半は土壌入れ替えに伴う採砂が行われていたため、遺跡が半壊した状態から調査を着手することになった。土地の開発行為に伴う緊急調査であったため遺跡の記録保存を

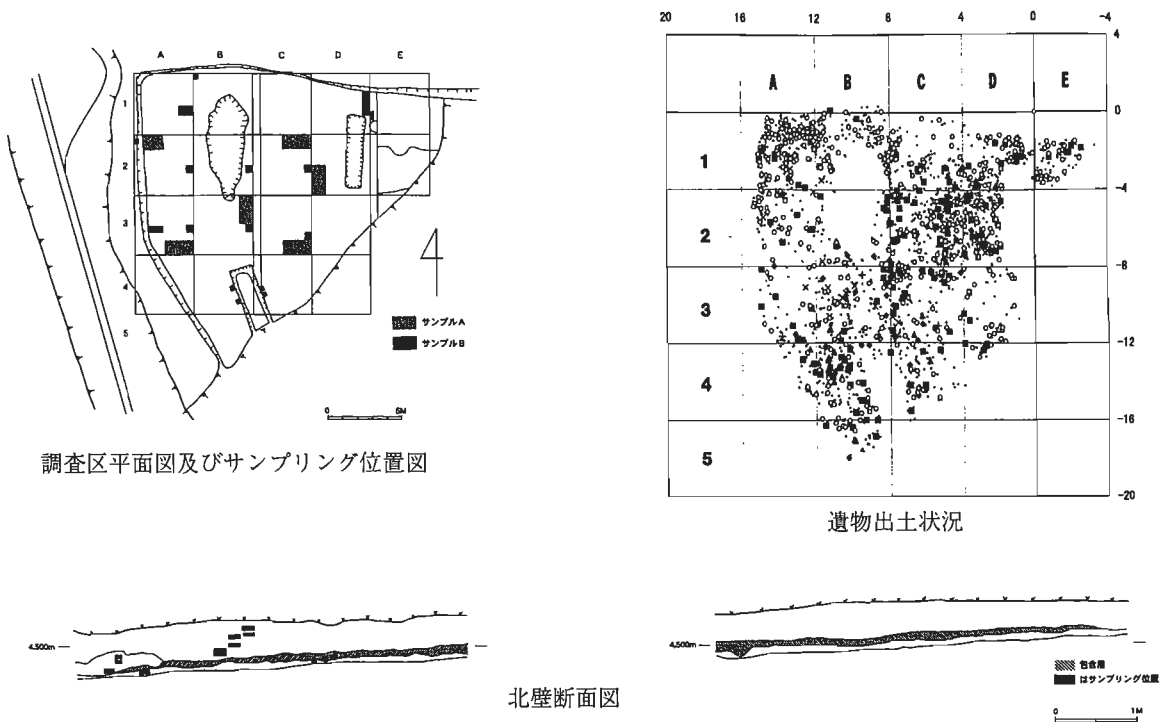


図5 調査区の概要

調査の目的とした。

白木原が報告した土器類は、胴部に突帯文と沈線文が施され、底部に葉痕を留める点に特徴がある。これらはいわゆる兼久式土器の範疇に含まれるものである。近年、兼久式土器が大量のヤコウガイとともに発見される調査例が相次いで報告されており、古代におけるヤコウガイ交易が積極的に議論されている（木下2000、高梨2000）。安良川遺跡においてもヤコウガイが大量に出土することが当初より予想された。

こうした研究動向を重視し、古代における交易活動と生態環境の関係を把握するための分析資料を得べく、以下の2点に重点を置いて発掘調査を進めた。

1. 遺物の出土状況を正確に把握するため光波測距機を使用し、平面図、立面図を作成する。
2. 理化学的な分析を行うため土壌サンプリングを実施する。

光波測距計を使用して取り上げた遺物は、人口遺物、ヤコウガイ、炭化物である。機械点をK1杭 (x, y, z) = (0,000, 0,000, 5,688) とし、そこから東側へ16mの地点に視準杭P0 (x軸) を、P0を視準して90度振った南側8mのところをK2 (y軸) を設定した。これら3点を利用して、包含層が残存する範囲に4×4mのグリッドを組み、東西方向にAからE、南北方向に1から5と記号を付けた。遺物出土地点のデータはK1杭を起点としたときの座標値である。取り上げた遺物には連番で遺物番号を付し、その番号を注記した。なお、出土位置のデータと平面、立面分布図および出土遺物は笠利町歴史民俗資料館に保管されている。

土壌サンプリングは、それぞれの専門家に依頼し、貝類遺存体、脊椎動物遺存体、植物遺存体の分析試料を回収した。A2から2グリッド、A3からD3グリッドは1×2mの範囲を任意に設定して、廃土を2mmメッシュで数回、その後5mmメッシュでふるい、ヤコウガイ片、貝玉、炭化物など微細試料の検出に努めた。A2からD2グリッドより以南の区域は自然遺物を2×2mの区画に分けて取り上げを行った。

北側のA1～E1グリッドから掘り下げと遺物の取り上げを最初に行い、完掘の後、暫時南側へと調査区を拡大していった。

4. 層序

I層：褐色砂層。本砂丘の最上位に堆積した無遺物層。

II層：灰褐色混砂土層。調査区の北東側にレンズ状に堆積する。水分を多く含み、硬く締まり、粘性が強い。淡水産貝類を含む。

III層：黒褐色砂層。遺物包含層。

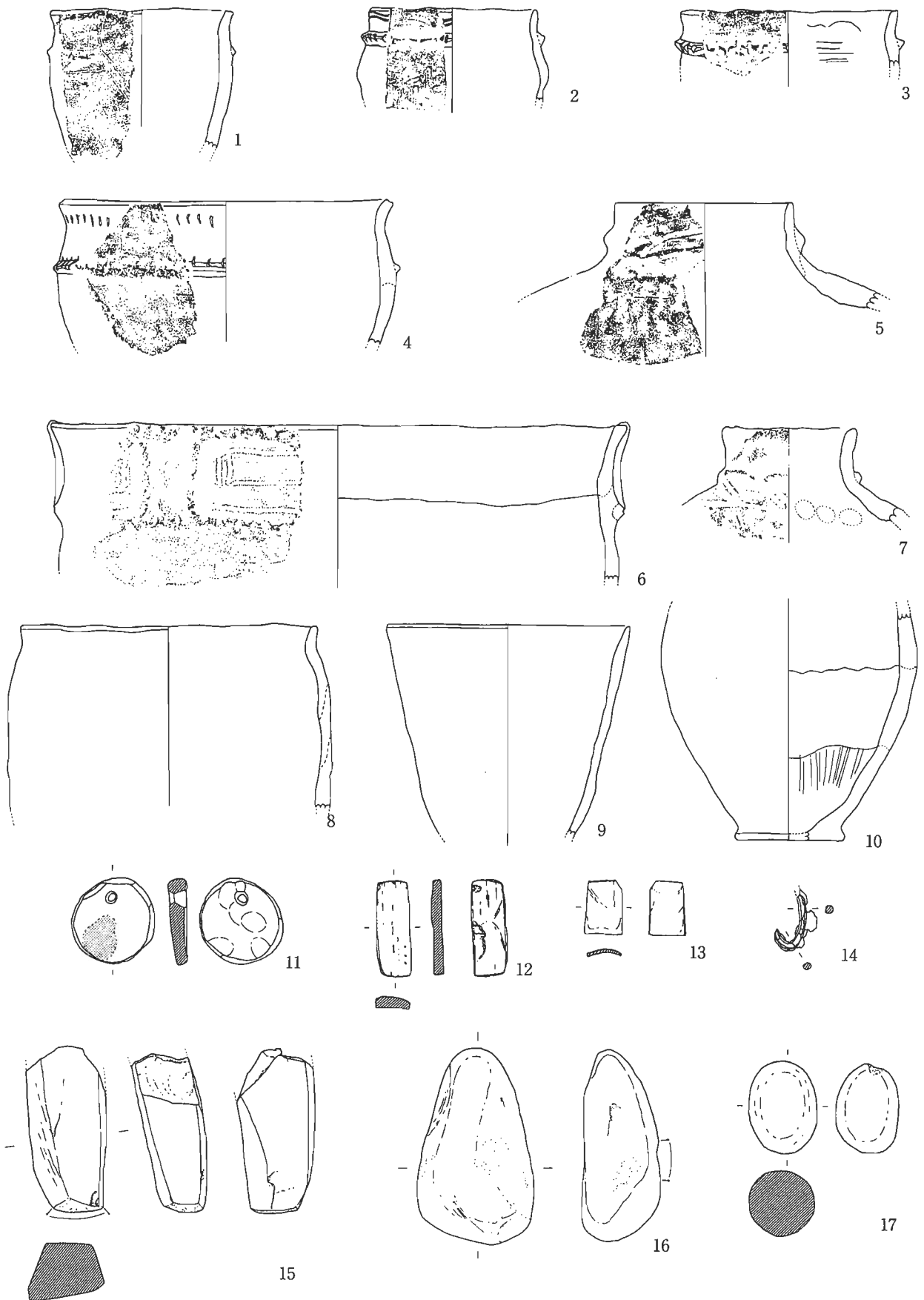
IV層：黄白色砂層。無遺物層。火山噴出物を含む。

遺物包含層であるIII層を東西19m、南北16mの範囲に確認した。包含層は北に厚く、南へ行くほど薄くなる。土器、石器、貝製品、貝類遺存体、炭化物を多く含むが、魚骨、獣骨は少なかった。なお、黒住耐二氏により、II層は過去の自然水路であった可能性が高いとの所見を得た。

5. 遺構

ウニの棘、骨類、ミミガイ、オカヤドカリ、ヤコウガイがまとまって検出された土坑がそれぞれ1基ずつ検出された（ただし、いずれもセクション観察用の畦および壁面に残っている場合のみの確認）。これらは海産物の捕食と廃棄活動の中で残されたものであろう。

ピットは4基確認されている。サンゴ砂利を敷いた隅丸方形のプランとそれに付随すると見られ



0 10cm

図6 安良川遺跡のおもな出土遺物

1~6・8・9. 甕、7・10. 壺、11. 土製品、12・13. 無貝符、14. 鉄製釣針、15. 砥石、16. 敲石、17. 不明石器

るピットが1基検出された。ただし、プランの掘り方は確認できなかった。ピットが列をなす状況は認められなかったため、根拠に乏しいが、平地式の住居であった可能性は残る。

6. 遺物出土状況

遺物は調査区の全面に広がっているが、北側ほど多く、南側に向かうに従い減少する。出土遺物はヤコウガイの殻と蓋が最も多い。貝匙および未製品などがある箇所集中的に検出される状況は認められなかった。

7. 出土遺物 (図6)

土器は兼久式土器が大半を占めるが、成川式土器と見られる壺、須恵器が1点ずつ検出されている。その他、有孔土製品、貝製品(貝符、貝玉、ヤコウガイ製貝匙未製品、有孔ヤコウガイ製品、貝玉、貝錘)、石器(砥石、磨石)、鉄製釣針、自然遺物(貝類遺存体、植物遺存体、動物遺存体)がある。

8. 成果

遺跡の状態 遺跡の南半分は採砂により破壊されているが、遺物包含層を東西約19m、南北16mの範囲に確認した。包含層からは土器、石器、貝製品、貝類などが多く検出された。破壊を免れた箇所に関しては保存状態が極めて良好であった。

調査の方針 光波測距計を使用して土器、石器、貝製品、ヤコウガイ、炭化物の出土地点を記録した。取り上げた遺物は約2200点であり、ヤコウガイがその大半を占める。

遺構 同一の貝類を一括で廃棄した状況が5箇所確認された。これは、一回の廃棄単位を示す可能性がある。調査期間の制約から、全ての廃棄単位を抽出することはできなかったが、本来は複数回の廃棄が繰り返され、貝塚が形成されたと考えられる。その他、住居の可能性のある遺構がA4、B4グリッドにおいて確認された。

出土遺物 土器、貝製品、鉄製品など良好な資料が検出された。土器は、いわゆる兼久式土器の範疇に収まるものが大半を占める。これらについては、調査報告書の中で詳しく論じられているので、詳細は譲りたい。

遺跡の性格 遺跡の北東側は標高約3.5m、北西、南西、南東側は標高約4.0mを測る。標高の低いA1～D1グリッド、A2～D2グリッドではヤコウガイを含む貝類が多く、標高が若干高くなるA3～D3グリッド、A4～C4グリッドは人口遺物が多い。住居状遺構の存在と合わせて考慮すると、標高の低い北側は貝類などを廃棄する場、標高の高い南側を居住区として利用していた可能性がある。ただし、遺跡の南半分は破壊されているため、土地の利用状況は推測の域を出ない。

引用、参考文献

木下尚子 2000「開元通宝とヤコウガイ」『高宮廣衛先生古希記念論集 琉球・東アジアの人と文化』上巻 高宮廣衛先生古希記念論集刊行会 pp.187～219

白木原和美 1971「大島郡笠利町の先史的所見」『南日本文化』4号 鹿児島短期大学南日本文化研究所

高梨 修 2000「ヤコウガイ交易の考古学 - 奈良～平安時代並行期の奄美諸島、沖縄諸島における島嶼社会 -」『現代の考古学 5 交流の考古学』朝倉書店 pp228～265

中山清美編 2005『安良川遺跡』笠利町文化財報告書第27集 笠利町教育委員会